

# デニシヨン舞踊団来日公演における石本男爵の公演評

武 藤 大 祐

Baron Ishimoto's Review on the Denishawn Performance in Japan

Daisuke MUTO

## 序

アメリカのモダンダンス黎明期を牽引したルース・セント・デニス (Ruth St. Denis, 1879-1968) およびテッド・ショーン (Ted Shawn, 1891-1972) の率いるデニシヨン (Denishawn) 舞踊団は、1925年から26年にかけて大規模なアジア巡演を果たし、往路と復路の二度にわたる日本公演においても大きな成功を収めた。新聞や雑誌などには夥しい数の記事が掲載され、大阪の「河合ダンスバレエ団」がただちに彼らの演目を模倣し、小寺融吉が著書『舞踊の美学的研究』(1928年)でデニシヨン舞踊団を高く評価するなど、反響は多方面に及び、日本の近代舞踊の展開における画期的な出来事として歴史に刻まれている。

そうした中、ルース・セント・デニスの自伝(1939年)で紹介されて以来今日に至るまで繰り返し参照されているのが、東京の英字新聞 *The Japan Advertiser* (1925年9月22日付)に掲載された Baron Ishimoto (石本男爵) による公演評である。しかしこの記事は、日本では当時から今日までほぼ言及されることがなく、奇妙にも知られないままになっている。本稿ではこの舞台評をめぐって、二つの問いを立てて検討する。すなわち、この記事はなぜ日本で無視されてきたのか、そしてこの記事を書いた石本男爵とはどんな人物であり、どのような経緯でこれを書いたのか、である。

## 1. 石本男爵の記事に対する評価

セント・デニスは、1939年の自伝で次のように記している。

*The next morning. The Baron Ishimoto wrote in the Japan Advertiser: "It is natural for Japanese to look on America and conclude that nothing new or creative can be found in the land of radio and automobiles. But an evening in the Imperial Theater was enough to revolutionize our opinion.*

*"The Denishawn Dancers convinced the Japanese that America is now creating its own art, and moreover it has something very suggestive of the future. Whenever a historian tries to write a book on the relations of the United States and Japan, he cannot ignore the coming of the Denishawn Dancers in 1925 to Japan, because by their appearance on the stage of Tokyo the attitude toward America in respect to art has been completely changed."* (St. Denis 1939: 266-267)

(翌朝、石本男爵が *Japan Advertiser* にこう書いた。「日本人がアメリカを見て、ラジオや自動車の国に新しいものや創造的なものは何もあまいと片付けてしまうのも、無理はない。しかし帝国劇場での一晩で、我々の意見は根本から変わってしまった。

「デニシオン舞踊団は日本人に、アメリカが今や自らの芸術を生み出しつつあり、さらにはそこに未来を示唆する何物かがある、と確信させた。アメリカ合衆国と日本の関係に関して本を書こうとする歴史家は、1925年のデニシオン舞踊団の来日を無視することはできない。彼らが東京の舞台上に登場したことで、芸術に関して、アメリカに対する姿勢は完全に変わってしまったからだ」]

なお自伝中のこの部分は日記体で記されており、「翌朝」とは1925年9月3日を指している。石本男爵の記事が掲載されたのは9月22日のことであるが、この齟齬については後述する。

アメリカの有力な舞踊評論家であったウォルター・テリーはセント・デニスのこの箇所を複数の著書で引用し (Terry 1969: 142; Terry 1976: 119)、またデニシオン舞踊団のメンバーとしてアジア公演にも参加したジェーン・シャーマンもおそらく The Japan Advertiser の原文から繰り返し引用している (Sherman 1976: 43; Sherman 1983: 71, 83)<sup>1</sup>。このような経緯を背景に、近年の学術的な研究においても、この記事はセント・デニスの伝記からの重引 (Bernardi 2006: 194) あるいは原文からの引用 (Scolieri 2020: 220) の形で紹介されている。デニシオン舞踊団のアジア巡業における現地での反応として、これほど頻繁に言及されるものは他になく、その意味で石本男爵のこの記事は舞踊団を語る上で重要な一次資料として扱われてきたといつてよい。

ところが日本においては、管見の限り、この記事への言及は見当たらない。デニシオンが公演した帝国劇場は、毎月の演目について書かれた新聞記事をまとめて月刊誌『帝劇』で紹介しているが、そこにも含まれていない。

もっとも、「帝劇九月興行 専属女優劇とデニシオン大舞踊 新聞評抜萃」が掲載された『帝劇』1925年10月号は9月21日に発行されており、また翌11月号の同欄は10月の興行にあてられたため、9月22日に発表された石本男爵の記事は単にスケジュール上の都合でいずれからも漏れる形になったのは事実である<sup>2</sup>。しかし11月号には「十月興行新聞評抜萃」とは別に、9月25日付の東京日日新聞に掲載された長文記事「デニシオン舞踊団に就て」が転載されているのに対し、「石本男爵」の記事はそうした扱いを受けてはいない。

他方、デニシオンの来日公演を詳しく調査した片岡康子 (片岡 1985; 片岡 1999) もやはり「石本男爵」の記事にはふれていない。このように、英文紙であることを差し引くとしても<sup>3</sup>、この記事は日本国内と国外とで大きく異なった評価を受けていることになる。

## 2. 石本男爵の記事 “Denishawn Message”

そこで問題の舞台評の全体を確認することにしたい。The Japan Advertiser の紙面は以下の通りである (図1～4)。

- 
- 1 シャーマンの引用には細かな語句の変更などが認められ、また語順や語彙の異同を見る限り、Terry (1969) は St. Denis (1939) からの重引、Terry (1976) は Sherman (1976) からの重引と思われる。
  - 2 なお1925年10月号の「新聞評抜萃」に掲載されているのは、國民新聞、時事新報 (2件)、中央新聞、中外商業新報 (2件)、帝國新報、東京朝日新聞、東京大勢新聞、東京日日新聞、東京毎日新聞、東京毎夕新聞、東京夕刊新報、二六新報 (2件)、報知新聞、都新聞 (2件)、やまと新聞、讀賣新聞 (2件)、萬朝報 (2件) の計23件で、うちデニシオン舞踊団に言及しているものは14件である。
  - 3 同じく英文紙 The Japan Times and Mail に9月13日付で掲載されたデニシオンに関する記事も日本ではまったく紹介されていない。



**Denishawn Message.**

To the Editor:

It is far from the adventurer to say that there is at least one thing besides the immigration problem which restrains the friendship of the United States of America and Japan. That is our poor appreciation of American art compared to that of other civilized countries. Really, Japanese themselves very often think their art is the best in the world, including that dancing.

At the same time, however, we are very humble in appreciating and accepting the art and literature of Western civilization, mostly from France, Great Britain, Germany and Russia. We are crazy to have a price of Rodin's work; we have completed the translation of Shakespeare's plays by Dr. Tsubouchi; Goethe's "Faust" was very carefully translated into Japanese by Dr. Mori, under the auspicious of the Educational Department; and we have introduced much of Russian

図3 The Japan Advertiser (1925年9月22日)、5面、読者投稿欄の記事 Denishawn Message の部分 (2列目)。

一見してすぐに判明するのは、当該の記事 "Denishawn Message" が、Readers in Council と題する欄 (読者投稿欄) に掲載されていること (図2)、そして執筆者の署名が「K.I.」のみであること (図4)、の二点である。次に全訳を掲げる。

**デニショーンメッセージ**

編集部へ

アメリカと日本の友好を制限している要因が、移住の問題の他に少なくとももう一つあると言っても、決して無闇な放言とはいえません。すなわち、アメリカの芸術に対する我々の理解が、他の文明化された諸国のそれに比して貧困だということです。事実、日本人は彼らの芸術が、あの舞踊も含め、世界で一番であると常々考えているのです。

しかし同時に我々は、西洋文明、おもにフランス、大英帝国、ドイツ、ロシアの芸術や文学を鑑賞し受け容れることにかけては実に謙虚です。ロダンの作品には熱狂していますし、シェイクスピア

art—Tchikovsky's music, Tolstoi's novels, and Nizinskiy's dance. Moreover, some of them go so far to study Latin or Greek to get a real knowledge of European civilization. Therefore, it is natural for Japanese to look on America as being busy transplanting various art objects from her old mother countries in Europe, and to conclude that nothing new or creative can be found on the land of automobiles and radio.

Two evenings in the Imperial Theater were enough to revolutionize our opinion toward American art.

The Denishawn dancers convinced Japanese that America is now creating its own art and moreover, it has something every suggestive of the future. We have realized that the U.S.A. is a country of science and material, plus a country of creative new art.

The Denishawn group has its significance in this respect. Whenever a historian tries to write a book on the relations of the U.S.A. and Japan, he can not ignore the coming of the Denishawn dancers in 1925 to Japan because by their appearance on the stage of Tokyo the Japanese attitude toward America in respect to art has been completely changed.

In other words, the historians must pay more importance to them than to any other wellknown American visitors to Japan after Commodor Perry, including President Grant, President Taft and the late William J. Bryan.

K. I.

Tokyo, September 20.

図4 The Japan Advertiser (1925年9月22日)、5面、読者投稿欄の記事 Denishawn Message の部分 (3列目)。

アの戯曲はすべて坪内博士が翻訳しました。ゲーテの『ファウスト』は教育省の支援を受けて森博士が注意深く和訳しましたし、ロシアの芸術もたくさん紹介されています。すなわちチャイコフスキーの音楽、トルストイの小説、ニジンスキーの舞踊です。さらには、ヨーロッパ文明の本物の知識を得ようとラテン語やギリシャ語を学ぶまでに至る人々もいます。ですから日本人が、アメリカなどはヨーロッパという旧母国にあたる国々から様々な芸術品を移植するのに忙しいのどと見なし、自動車やラジオの国に新しいものや創造的なものは何もあまいと片付けてしまうのも、無理はないのです。

〔ところが〕帝国劇場での二晩は、アメリカの芸術に対する我々の見解を根本から変えるに十分でした。

デニシジョンの踊り手たちは日本人に、アメリカは今や自らの芸術を作り出しており、さらにはそこに未来を強く〔“every”を“very”に修正して読む〕示唆する何物かがある、と確信させたのです。アメリカ合衆国は科学と資源の国であると同時に、創造的な新しい芸術の国でもあると悟りました。

デニシジョン舞踊団はこの点において重要性を持っています。アメリカ合衆国と日本の関係に関して本を書こうとする歴史家は、1925年のデニシジョン舞踊団の来日を無視することはできないでしょう。というのも、彼らが東京の舞台上に登場したことで、芸術に関して、アメリカに対する日本人の姿勢は完全に変わってしまったからです。

言い換えれば、歴史家たちは、ペリー提督以来、日本を訪れた他の名高いアメリカ人たち、たとえばグラント大統領、タフト大統領、あるいは故ウィリアム・J・ブライアンよりも、彼らにこそ重きを置かねばならないのです。

K. I.

東京、9月20日

---

まず、このテキストが記者や批評家によるものではなく読者投稿であるという、いささか驚くべき事実は、セント・デニスやシャーマンによる引用からは読み取れない情報である。とくにセント・デニスの自伝では、この記事の後に続けてMacho-Shinbun(不詳)とHochi-Shinbun(報知新聞)の評を紹介しているが、記者の執筆記事と読者投稿を同列に扱い、あまつさえ後者を先頭に据えるのは、報道に対する評価としてかなり奇異である。なおThe Japan Advertiserでは、1925年9月2日にデニシジョンの帝劇公演初日の様子を1面に載せており、好意的な評言で華々しく報じている(図5～7)。さらには1925年9月25日には「映画・音楽・演劇」欄でデニシジョン一行が松本幸四郎から踊りの教えを受けたエピソードも紹介されているが、セント・デニスもシャーマンもこれらには言及していない。

通常の舞台評であれば上演された作品の内容に焦点を当てるが、石本男爵の記事はデニシジョン来日という出来事そのものを外交の観点から論じており、それゆえ彼らにとって、掲載媒体以上に、文章の内容が特別な意味を持ったのだろうか。とくにインドを目的地として「東洋(Orient)」に足を踏み入れたセント・デニスにとって(St. Denis 1939: 262, 274)、異世界の入口である日本の観客がデニシジョン公演を通じて「アメリカ」の芸術に目を開かれたという石本男爵の修辞は、「東洋」の文化に魅了された自身の姿を鏡写しにしているように思われたかもしれない。

しかし、いかにセント・デニスにとって喜ばしい内容であったとしても、これが読者投稿に過ぎない以上、日本において注目を集めず、『帝劇』の記事紹介欄からも漏れていることは至極当然であろう。次に、この記事の筆者であるK.I.すなわち「石本男爵」に目を移してみたい。

Double the Combined PAID Circulation of All Other Foreign Dailies Published in Japan

# The Japan Advertiser

The Largest PAID Circulation of All Foreign Dailies Published in the FAR EAST Price 10 Sen

No. 10,751

TOKYO, WEDNESDAY, SEPTEMBER 2, 1925

### RUSSIAN AVIATORS LAND IN NAVAL ZONE HELD TEMPORARILY

Pilots in One Plane Forced Down at Higashima in Error and Territory Held Under Arrest

RELEASE AFTERWARD AND GO TO OKAYAMA  
Japanese Military and Aviation Men Much Displeased—Fog Said to Have Caused Landing of Moscow Flyers.

Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

RUSSIAN IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION  
Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

RUSSIAN IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION  
Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

RUSSIAN IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION  
Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

RUSSIAN IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION  
Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

RUSSIAN IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION  
Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

WORKING FOR PEACE  
Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### American Airlines Get Off Slightly in Flight to Hawaii.

Kobe, Kan. SAN FRANCISCO, August 31.—The airlines which are attempting the flight to Hawaii, began off at 10:15 this morning. At 10:30 they were in communication with the Honolulu office. The flight was held up for several hours in the morning. The plane was held up for several hours in the morning. The plane was held up for several hours in the morning.

### At Services for Earthquake Victims in Honjo.

Colonial Ministers attended the services yesterday morning in Honjo for the victims of the earthquake and an American representative. The services were held in the morning. The services were held in the morning. The services were held in the morning.

### FAVORS MORE LOANS FOR POWER FIRMS

Mr. George S. Bucher, of Westinghouse Japan, Opposite About Agency. Expects Great Industrial Expansion in This Country for Public Utilities.

### LARGE CROWDS ATTEND SERVICES HERE IN OBSERVANCE OF SECOND ANNIVERSARY OF 1923 DISASTER

Thousands Crowd into Hiko-ko in Honjo Where Government Officials Participate in Principal Ceremonies. CITY IS STILL AT 11,558 WHILE TEMPLE BELLS TOLL

### BRITISH IN SHANGHAI DEPLORE FRICTION

Business Men Take Steps to Remove Discard With Chinese Element.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### FAVORS MORE LOANS FOR POWER FIRMS

Mr. George S. Bucher, of Westinghouse Japan, Opposite About Agency. Expects Great Industrial Expansion in This Country for Public Utilities.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### PRINCE, PRINCESS ASK ASE GUESTS IN LONDON

LONDON, August 31.—A banquet given in honor of Prince and Princess Asaka, which was held at the Imperial Hotel, London, last night, was attended by a large number of guests.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

### SECRETARY OF WAR WEEKS IS TO QUIT

Resignation of U.S. Cabinet Official Expected to Take Place October 1.

### LAKE PREDICTIONS SCORED BY SAVANT

Japanese Meteorologist Discredits Country's Lake Service Against Shock.

### APPARATUS IS LACKING

Mr. Kumitomi Discards Theories Used in Forecasting Tremors in Japan.

### WORKING FOR PEACE

Text of Japanese Note Accepting Customs Passby Inspection is Issued.

**Denishawn Dancers Reveal Art in Acts at Imperial Theater**

The American dance, a harlequin wearing a new dozen glittering costumes, each one of which paraded the older and exotic themes of a dozen different schools of ballet, shone forth at the Imperial Theater last night when the Denishawn dancers opened a three weeks engagement for the first time in Japan. The audience was dazzled by the lavishness of the display, thrilled by this new creature's graceful prouetting, and piqued because not all of it was completely understood because it was new, but always appreciative of the rhythm, the vaguely realistic conceptions, the light fantastic art.

Algeria was a complete one-act drama "snatched off the legitimate stage, led back into the boudoir for a make-over, and then thrust out in more delightful and original form as a classic ballet. That was the third section of the evening's exhilarating performance, and the one that brought forth the loudest surge of applause. Its symbolism went to some extent ungrasped by the audience, but they liked it all the more because it was not so obvious.

It is the story of a girl of the Arabian desert tribe known as the Ouled Na-Il, whose daughters are the geisha of the Near East. It is the custom in this strange country for the girls to be trained as dancers, to go off to the cities, and then to return with their fortunes in strings of coins about about their necks. Miss Ruth St. Denis is the girl who appears first to Ben Saadi (Mr. Ted Shawn) in a vision. She is veiled and he first sees her in a coffee house. He asks Fatima, the keeper, who she is. She cannot tell. Then he asks her to dance. As she dances, gradually before the eyes of the onlooker and of the young dreamer, the dream is transformed into reality, and as the girl ends her dance and discloses a necklace, Ben Saadi recognizes her in actuality as the girl of his dream. The setting is gorgeous and the chorus in this piece de resistance reaches a convincing perfection.

A bit of local color had come into one of the other acts. This was the dance of the volcano goddess, when Miss St. Denis, appearing in solo and clad in a white veil to impersonate the volcano itself, seemed to many of the Japanese to partake a little of their own Fuji. It was just a fleeting impression, however, for Miss Denis outdid the stationary cone by a chapter of rhythmic movement, all of which interpreted the spirit of the mysterious being that dwells in the crater.

This was part of the impressionistic offerings. There was also one dance of a truly American theme, an invocation to the thunderbird performed by Mr. Shawn. He sketched, just as the American Indian had done centuries ago, the outline of a thunderbird with corn. In finishing, he stooped down and threw an additional sprinkle for the eye of the bird, just as the prayer of the Indian for rain is answered and the first drops come down. Other solos and duets, a Gringo Tango, with Miss Ernestine Day and Mr. Shawn, and a dance on a Texas theme, in which Miss Douglas is his partner, a negro dance in overalls by Mr. Charles Weidman, a Creole dance by Miss Doris Humphrey and an ensemble Boston Fancy complete the American sketches, which transported the Americans present for brief moments to their native land.

Most interesting of all to one of musical tastes was the opening septette of dances that visualized classics of symphony and opera. The Sonata Pathetique, in which Miss Humphrey, who is the understudy to Miss St. Denis, took the leading role, opened the program, a perfect co-ordination of the two arts. Miss Humphrey was also the author of a solo dance which she herself designed and which was

(Continued on Page 2)

図6 The Japan Advertiser (1925年9月2日)、1面、デニシオン舞踊団の帝劇公演開幕を報じる記事の部分。

**Denishawn Dancers Score Great Success.**

(Continued from Page 1)

set to a Scherzo Waltz by Ilgenfritz. Mr. Shawn led a trio of girl dancers in an Etude of the French Revolution by Chopin, which has a touch of drama in it, and a Greek Veil Plastique, set to the Ballet from Gluck's "Orpheus," was contributed by Miss St. Denis. It was the same that had aroused nation-wide interest in America when she first presented it at Berkeley, California, in a natural setting.

The dances were all satisfying to an audience that felt and breathed with the undulations of the performers. The dancers were artists who sketched evanescent lines, pastels, and color drawings, their portraiture always suggesting images to those of perception, always rich and decorative. The American dance has made its debut in Japan.

図7 The Japan Advertiser (1925年9月2日)記事の続き(2面)。

### 3. 石本男爵とデニシオン

『旧華族家系大成』によれば、セント・デニスという「石本男爵」が、陸軍大臣を務めた石本新六(1854-1912)の嗣子で、1925年の時点では実業家として活動していた石本恵吉(1887-1951)であることはほぼ特定される(霞会館華族家系大成編輯委員会 1996: 125)<sup>4</sup>。とはいえ、来日したデニシオン一行を鎌倉見物に招待した「石本男爵」については、セント・デニス、シオン、シャーマンが若干の記述を残しているため、これらを総合することで補足的な裏付けを得ておくことにする。以下がそれぞれの該当箇所である。

4 Scolieri (2020: 202, 461 n 70) も同様に特定しているが根拠を示していない。

九月〔日付なし〕——モダニストの石本夫妻と素敵な一日を過ごした。男爵とその夫人が鎌倉の大仏を見に招待してくれたのだ。彼らはこの聳え立つ像の近辺に小さな家を持っており、昼食によばれた。日本で会った中でも最も鋭い知性をもつ二人と、政治や社会に関するたくさんの事について話した。そしてもちろん、我々の舞台についての男爵の見事な指摘にも魅了された。(St. Denis 1939: 271)

〔1925年8月19日の日本への〕到着から1925年9月1日の公演初日までの間、我々はリハーサルや観光、そして待ちに待った買物をする自由時間が10日ほどあった。石本男爵夫人は、日本の女性権利運動の主導者で、ニューヨークで既に会っていたのだが、鎌倉へ有名な仏像を見に連れて行ってくれた。(Shawn 1979: 164)

8月23日：今日はみんなで鎌倉へ、巨大な大仏を見に出かけた。〔日本の女性権利運動の主導者である石本男爵夫人に招かれたのだ。〕40フィートもの高さがあり、目は純金で、紀元437年の造営だという。我々は観音も見た。木像だが金箔で覆われ、頭が十一あり、紀元200年の作だという。観音の前で蠟燭に火をつけ、僧が念仏を唱えた。とても印象深かった。(Sherman 1976: 38-39)

これらの記述から、①「石本男爵」夫妻が鎌倉に「小さな家」を持っていたこと、②男爵夫人とショーンがアメリカで既に接触していたこと、③この夫人が日本における「女性権利運動の主導者」であることがわかる。そしてこのいずれもが、「石本男爵」が石本恵吉、その夫人が石本静枝(後の加藤シヅエ、1897-2001)であることを傍証する。

東京帝国大学工学部を卒業して三井鉱山に就職した石本恵吉は、設計技師・廣田理太郎の長女である静枝と1914年に結婚した後、自らの希望で三池炭鉱の現場に勤め、1919年からアメリカ出張に出ている。静枝も恵吉に留学を薦められて後を追ひ、夫妻はアメリカで生活を共にし、1920年に帰国した。静枝は、1922年にアメリカから来日した産児制限論者のマーガレット・サンガー(Margaret Sanger)との交流で注目を集め、日本における婦人解放運動の旗手となった存在であるが、サンガーとの接点も夫妻が米国滞在中に財界人や政治活動家、知識人などと多く交流した中で生まれたものであった(山内 2000: 52-53; 加藤 1997: 90; ホッパー 1997: 42)。ショーンと静枝がニューヨークで会っていた事実については記録が見つかっていないが、財界や知識人との交流に力を入れていたショーンであるから、彼女と面識があったとしても違和感はない。デニショーンの来日にあたっては、彼らが、ニューヨークの実業家で日米貿易に強い関心を寄せていた親日家のフランク・ヴァンダーリップ(Frank A. Vanderlip)から渋沢栄一、村井吉兵衛への紹介状を携えて来たことが大きく働いたのであるが(「デニショウ一行 日本舞踊・能楽研究」1925)、このヴァンダーリップと静枝は交流があった(加藤 1985: 187)。そして最後に、夫人の生家である廣田家の別荘が鎌倉の極楽寺坂下にあり、夫妻もしばしば利用していた(加藤 1981: 15)。セント・デニスのいう「小さな家」はこれであろう。

ところで1925年のデニショーン舞踊団来日は、単に当時の帝劇が力を注いでいた海外芸術家の招聘事業の一部であっただけでなく、まさに石本恵吉が The Japan Advertiser の記事冒頭で書いたように、「移住の問題」すなわちアメリカにおける日本移民排斥運動を背景とした日米の民間外交という側面を確かに持っていた。デニショーンの来日は、いわゆる「排日移民法」が成立したまさに翌年の事だったのであり、だからこそ恵吉は「アメリカの芸術に対する我々の理解」によって「アメリカと日本の友好」が促進されるはずだと主張していたのである。帝劇専務の山本久三郎もま



た、デニシオン舞踊団の公演にあたって、同劇場が「世界的藝術家」を招聘する理由は「一流の藝術を日本に紹介する」だけでなく「國交上にも意義あらしめたいと云ふ考へである」と述べながら、日露戦争後の両国の親善においても帝劇でのロシア人藝術家の招聘公演が貢献しているはずだとその自負を語っている（山本 1925）。

したがって、セント・デニスやショーンの「東洋」への強い憧れや、アジア巡演を可能にした興行師のアスウェイ・ストロークの絶大な手腕はもちろんのことであるが（cf. 井口 2019: 171）、同時に日米をつなぐヴァンダーリップ、渋沢、村井といった財界人が彼らの来日を後押ししていた事実を過小評価することはできない。これを土台として、デニシオンは帝国劇場の媒介を通じ、日本の古典的な芸能の担い手たち（松本幸四郎、尾上梅幸、宮内庁楽部、片山春子など）とのきわめて充実した交流を経験することができたのである（「デニシオン一行 日本舞踊・能楽研究」1925; 児玉 2015: 226）。

このように、来日したデニシオン一行は、財界と帝劇、そして歌舞伎や能などの古典芸能関係者が形作るネットワークの中に深く迎え入れられた。しかしそのような観点から見る時、日本での石本夫妻の影はいかにも薄いものでしかない。

そのことを端的に示す資料として、『帝劇』が毎号掲載している「消息日誌」がある。8月24日の項には「デニシオン第舞踊團一行は鎌倉見物に行つた」とあるのみだが、9月3日の項には「デニシオン大舞踊團一行幸四郎私邸を訪問し、次で三越へ行つた」、9月8日は「デニシオン第舞踊團の一行は午後二時半より永田町村井邸のテイ・パーティー招待に出席し、午後六時半よりセント・デニス女史及びショウン氏外二名は幸四郎氏の招待に依つて歌舞伎座に『紅葉狩』を見物した」など（「消息日誌」1925）、具体的な人名を挙げながら詳しく報告している。翌1926年10月の滞在時も『帝劇』はデニシオン一行の消息を詳しく報告しているが（「デニシオン大舞踊團在京日誌」1926）、尾上梅幸、松本幸四郎、光吉夏彌、山本久三郎などデニシオン一行を取り巻く存在として逐一示される人名からは、ある種のサークルが形成されていたことが窺われる。石本恵吉は、男爵とはいえ、こうした人脈からは明らかに距離のある存在だったようである。静枝は次のように記している。

石本恵吉という人は男爵家の長男でありながら労働運動に興味を持ち、私と結婚するとすぐに三池炭鉱の鉱夫たちと一緒に暮らすようになりました。私も鉱山で働く人たちのみじめな暮らしを目にしながらかつ三池で新婚生活を送ったのです。

石本はまもなく身体をこわし東京へ帰ってきましたが、やがて大正デモクラシーの時代、ロシア革命の成功が聞こえてくると、本場で革命の勉強をしたいといい出して、一人で先にアメリカへ渡ってしまいました。

その頃のアメリカは、ごく一部の過激な思想の持主たちが、ヨーロッパからロシアへの足がかりとして暗躍していたようで、その革命家たちのアジトがメキシコにあったそうです。石本もよくメキシコへ行ってそういう人たちとつきあっていたらしいのです。自ら過激な思想の中に飛びこんでいったようです。ニューヨークでは片山潜さんと始終あつては相談をしていたといひます。

ですから石本のやることは労働者風でかつ革命家的であつたわけです。（加藤 1984: 69）

恵吉の「革命的」な行動はやがて挫折を迎えるが、少なくとも1925年当時、こうした非常に個性的な人物が、来日したデニシオンと個人的な交流を持っていたとしても、傍流に属する存在であつたことは想像に難くないのである。

ところでセント・デニスの記述によると、石本男爵の記事が書かれたのは「9月3日」となっており、引用も原文と異なる箇所が散見される。全般的に誤記の多いセント・デニスの文章ではあるが、原文との異同の内、目を引く点が一つある。すなわち、25日に掲載された原文では“Two evenings in the Imperial Theater were enough to revolutionize our opinion toward American art.”（帝国劇場での二晩は、アメリカの芸術に対する我々の意見を根本から変えるに十分であった）と記されているのに対し、セント・デニスの引用では“*But an evening in the Imperial Theater was enough to revolutionize our opinion.*”（しかし帝国劇場での一晩で、我々の意見は根本から変わってしまった）と、いささかニュアンスの異なる文に変わっているのである。

デニションの帝劇公演は1925年9月1日が初日であった。つまりセント・デニスの「9月3日」という日付と、22日の紙面にある「帝国劇場での二晩」は符合する。ここから推測されることは、恵吉は確かに初日と二日目を見てすぐに草稿をまとめ、セント・デニスに直接見せたのではないかということである。それゆえに、セント・デニスは9月3日に「石本男爵の記事が Japan Advertiser に掲載された」ではなく、「石本男爵が Japan Advertiser に書いた」と記しているのだとすれば、ここには恵吉とセント・デニスの交流の親密さが読み取れるともいえよう。セント・デニスにとって Japan Advertiser の恵吉の記事は、日本の新聞に出た好意的な評の一つというより、日本の友人である石本恵吉という個人による熱烈で感動的なコメントだったのかもしれない。そうであるなら、読者投稿に過ぎない恵吉の原稿を新聞記者たちによる報道記事を差し置いて第一に掲げているのも理解できよう。

## 結

以上見てきたように、セント・デニスやチャーマンおよび日本国外の批評家や研究者によって頻繁に言及されてきた「石本男爵」の記事は、デニション舞踊団来日公演を華やかに盛り立てた劇場関係者や財界といった主流からは外れた個性的な人物による読者投稿という、あまりにも周縁的なテキストであった。したがって日本では等閑視されてきたのも当然であるが、他方でセント・デニスやションたちと石本夫妻の個人的な交流、およびデニション来日を日米関係と関連付けた独特の内容ゆえか、このテキストはデニションにとって非常に重要なものになったのである。

しかしなぜ、石本恵吉はこれほどデニションに注目したのだろうか。デニションが、日本が初めてアメリカから迎える本格的な舞踊団であり、そこに芸術を通じた国際交流としての意義を恵吉が読み込んでいたことは既に見た通りである。しかし労働運動や社会主義革命に燃えていた恵吉は芸術に関しても一定の見識を持っていた。以下は、石本がヨーロッパ滞在中に書いた日記（1920年1月23日）の一部である。

芸術には二つある。耳によるものと、目によるものである。目によるものが詩と画と彫刻である。自分の経験では一番初めに詩が好きであった。然し其の美を真に表わす事に於いて画の方が印象が強いので画を選ぶ様になった。それが更に平面では満足しなくなると、立体的の彫刻となった。然るに、この彫刻の動くものである舞踏を更に敬重するに至った。ところが、この舞踏は耳による音楽と combine したものである。即ち舞踏を以て芸術の goal と言う事が出来よう（然し勿論舞踏と同時に奏楽の或るものである）。即ち orchestra, opera, ballet の如きものが、人類の作り得る芸術の最高の表現であらねばならぬ。（石本 2013: 206-207）

このように恵吉が唱える芸術ジャンルの発展史観がいかんにして形成されたものかは不明である

が<sup>5</sup>、やはり「舞踏を以て芸術の goal と言う事が出来よう」との一節は見逃しがたい。また「舞踏と同時に奏楽の或るもの」という但し書きは、音楽を伴わない実験的なモダンダンスについても恵吉が知っていた可能性を示唆する。しかし恵吉は同年2月19日にベルリンでバレエを見て、次のように記している。

夜 Celly de Rheidt の ballett を見た。初めて本当の舞踏のあるものを見た様な気がした。舞踏の各曲線の優美なる事には驚かざるを得ない。しかし、まだこれは最上のものではない様だ。もう一度是非 highest の ballett を見たい。(石本 2013: 248)

この一文からは、恵吉が舞踊を必ずしも数多く見ていたわけではないことが窺われる。むしろ観念的な芸術論として、「舞踏を以て芸術の goal」との信念を抱いていたのだろう。しかしそれゆえに、恵吉はアメリカでデニシオンと出会い、来日時には再会を喜び、英文紙への投稿記事によってセント・デニスたちに深い感銘を与える結果にもなったのである。

他方の静枝は、オペラや音楽に強い関心を持っており(加藤 1985: 109; 加藤 1981: 80-81)、また花柳流の舞踊もたしなんだが(加藤 1985: 237-242)、デニシオンとの出会いや鎌倉での出来事については一言も残していないようである<sup>6</sup>。その意味するところは不明だが、やはりデニシオンに強い関心を寄せていたのは主として恵吉の方だったのであろう。恵吉は、1920年3月6日の日記に、「Preussen に来て芸術を見ようとするのは誤りである。プロシアで学ぶべきものは其の applied science である。米国では business である」と書いている(石本 2013: 284)。この彼が五年後、東京でデニシオンの舞踊を見て、The Japan Advertiser に「アメリカの芸術に対する我々の見解を根本から変える(revolutionize)に十分」であったと書く時、彼の思想において舞踊芸術には多分に政治的なロマンが仮託されていたように思われる。

---

5 恵吉が、芸術家を政治家および宗教家との対比で説明する以下の部分も併せてみると、論じ方としてはヘーゲル風といえなくもない。

政治家も高遠の理想を持たなければならない。然し彼等は其の理想と現在行なう処とをはっきり区別する力を持つ事を要する。何となれば一足飛びに理想を実現する事が出来ないからである。と同時に理想のない政治家は、これを政治家と言うのも勿体ないほどである。

芸術家は直ちに其の理想を実現するものである。芸術家は其の理想あるを必要とし、更にそれを表す腕がある事を必要とする。もし現在と compromise するものがあればこれこそ芸術の賊である。

宗教家は丁度政治家と芸術家との間を行くものではないか。理想にも世俗にも徹底しないのが彼等の特長である。理想に徹底すれば殺されるし、世俗に徹底すれば生臭坊主となる。(石本 2013: 206)

6 静枝は1935年に英語で出版した自伝 Facing Two Ways: The Story of My Life の中で、日本における女性の社会的地位を論じる文脈で芸妓について考察を展開している(加藤 1985: 206-219)。デニシオン来日時、日本では新舞踊運動が進行しており、芸妓から近代的な「舞踊家」へと転身する者も現れていた(武藤 2020)。こうした状況を背景として、静枝はセント・デニスに何らかの関心を寄せてはいなかっただろうか。この点についてはさらなる考察を要する。

## 【参考文献】

- Bernardi, Vito di. (2006). *Ruth St. Denis*. Palermo: L'Epos.
- Scolieri, Paul A. (2020). *Ted Shawn: His Life, Writings, and Dances*. Oxford: Oxford UP.
- Shawn, Ted, with Gray Poole. (1979 [1960]). *One Thousand and One Night Stands*. New York: Da Capo.
- Sherman, Jane. (1976). *Soaring: The Diary and Letters of a Denishawn Dancer in the Far East, 1925–1926*. Middletown: Wesleyan UP.
- . (1983). *Denishawn: The Enduring Influence*. Boston: Twayne Publishers.
- St. Denis, Ruth. (1939). *An Unfinished Life*. New York and London: Harper & Brothers.
- Terry, Walter. (1969). *Miss Ruth: The "More Living Life" of Ruth St. Denis*. New York: Dodd, Mead & Company.
- . (1976). *Ted Shawn: Father of American Dance*. New York: The Dial Press.
- The Japan Advertiser*, September 2, 1925.
- The Japan Advertiser*, September 22, 1925.
- The Japan Advertiser*, September 25, 1925.
- The Japan Times and Mail*, September 13, 1925.
- 井口淳子 (2019) 『亡命者たちの上海楽壇——租界の音楽とバレエ』、東京：音楽之友社。
- 石本恵吉 (2013) 「Random Thoughts」、石本幸子編 『心の軌跡——加藤シヅエと石本恵吉男爵1919～1946』、東京：朝日新聞出版。
- 霞会館華族家系大成編輯委員会 (1996) 『平成新修 旧華族家系大成』上巻、東京：吉川弘文館。
- 片岡康子 (1985) 「日本の現代舞踊の成立過程——デニシヨン舞踊団の日本公演を中心として」、『お茶の水女子大学人文科学紀要』第38号。
- 加藤シヅエ (1981) 『ある女性政治家の半生』、東京：PHP 研究所。
- 加藤シヅエ (1984) 『思い出のふる』、東京：自由書館。
- 加藤シヅエ (1985) 『ふたつの文化のはざまから——大正デモクラシーを生きた女』(船橋邦子訳)、東京：青山館。
- 加藤シヅエ (1997) 『百歳人 加藤シヅエ 生きる』、東京：日本放送出版協会。
- 児玉竜一 (2015) 「デニシヨン舞踊団と七代目松本幸四郎——リンカーン・センター所蔵フィルムから」、『Who Dance?——振付のアクチュアリティ』 展覧会図録、東京：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館。
- 『消息日誌』(1925)、『帝劇』第35号(1925年10月号)。
- 『帝劇九月興行 専属女優劇とデニシヨウン大舞踊 新聞評抜萃』(1925)、『帝劇』第35号(1925年10月号)。
- 『デニシヨウン一行 日本舞踊・能楽研究』(1925)、『帝劇』第35号(1925年10月号)。
- 『デニシヨウン大舞踊團在京日誌』(1926)、『帝劇』第48号(1926年11月号)。
- ホッパー、ヘレン・M (1997) 『加藤シヅエ 百年を生きる』(加藤タキ訳)、東京：ネスコ。
- 武藤大祐 (2020) 「デニシヨン舞踊団のアジア巡演におけるヴァナキユラーな舞踊文化との接触——インドの「ノーチ」と日本の「芸者」をめぐって」、『舞踊學』第43号。
- 山内昭人 (2000) 「日本社会主義者とコミンテルン・アムステルダム・サブビューローとの通信, 1919-1920年」、『大原社会問題研究所雑誌』第499号。
- 山本久三郎 (1925) 「巻頭談」、『帝劇』第35号(1925年10月号)。

本研究は JSPS 科研費 JP18H00627 「舞踊の『芸術化』までの実証的検証：日仏伝統舞踊の性風俗からの分離」(研究代表者：安田静) の助成を受けたものです。